
世界で一番、優しい魔人

まいるど せぶん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番、優しい魔人

【Nコード】

N2351BA

【作者名】

まいるど せぶん

【あらすじ】

倫理感の欠如した『冷酷な』少年、暮井雄は、ある日一冊の魔導書を見つける。

ものは試しと、そこに記された召喚術を試してみた雄は、儀式の手順を間違え、逆に自分が異世界へ召喚されることになった。

召喚の魔方阵を通ったことで、悪魔の力を得た雄は、魔人と呼ばれる存在になり、暴れまくる。

しかし、悪の象徴であるはずの魔人の中では、現代日本という環境で育った雄は、断トツで人間に優しかった。

優しくない少年は、なぜか『優しい魔人』として名声を得ることになる。

序幕

幼い時分より、よく「人としての倫理観が欠如している」と評されたものだった。

要するに俺様は、優しさというやつを他の人間とは違った次元でしか持ち合わせていないらしい。

もちろん、理屈の上では理解できる。悪口を言えば傷つく。傷つくのは嫌だ。だからダメだ。そんなことは、嫌というほど教わった。だから、理性的に生きる限りにおいては、俺様とて大きな問題は起こしていない。

虫くらいなら迷わず殺すが、どうせゴキブリなんぞいくら殺そうが、誰も俺様を恨まないだろう。

「……………あん？　なんだこれ」

そんな俺様だが、家はヤクザでも何でもなく、それどころか由緒正しいお金持ち。

なんとなく一ー本当に、何の意図もなく、家の倉庫を漁っていると、革の表紙で設えられた、古くさい本が目をついた。

「これ……………もしかして、人間の皮膚を加工してんのかあ？　いくら何でも、俺様でもこれは趣味が悪いと思うが……………こんなもんを保管してるとは、親父も俺様を説教できる義理はないな」

表紙に文字はない。出版物ではなさそうだ。

とりあえずパラパラとページを捲っていると、どうも外国語で書かれたものらしく、文字は読めなかった。

読めないどころか、上下すらわかんねえ。

仕方なく、放り投げようとしたところで、挟まっていたらしいメ

モ用紙がはらりと舞い落ちる。

傷んだ髪だが、こちらは手書きの英語で走り書きされており、多少は読み解くことができた。

「なになに……召喚術？ 騎士……悪魔……エリゴール？」

要約すると。

この本は召喚術について記された魔導書で、このメモに書いてある儀式を行うと魔術が行使できるらしい。呼び出せるのは、エリゴールとかいうどこぞのティッシュのような名前をした、騎士の姿の悪魔。

実のところ、俺様はオカルトの類いは嫌いではない。

むしろ、圧倒的な未知の力で人を蹂躪してみたい。

だから。

暇潰しに、ここに書いてある内容を訳して、エリゴールとやらを召喚してみようと思った。

メモが挟まっていたページに描かれた魔方陣。図解を見る限り、へビの血を使って描くらしい。

「ま、人生何事もチャレンジだよな」

たぶん、社会的にはチャレンジしてはならない方向性なのだろうが。

俺様は、とりあえずへビをどこで盗み出すかを考えることにした。

——このとき、俺様は知らない。

わけのわからぬ外国語に苦戦した結果、儀式の手順を間違え。

エリゴールではなく、俺様自身が召喚の魔方陣を通り抜けてしま
うことを。

1・魔人誕生

どうしてこうなったのか。

黒光りする甲冑を纏い、手には長い槍を握っている。

あの本で見た、エリゴールの挿し絵。そのままの姿だった。

と言っても、池の水面を見る限り、強面な顔と燃えるような赤毛は、元の俺様のままのようであったが。

「……どうせ挿し絵の再現すんなら、馬もセットで付けやがれっこの」

よくわからない方向性にキレながら、俺様――暮井雄くれいゆうは池に小石を投げた。

「うおっ」

しかし、力任せに投げた小石は、凄まじい勢いで水面を突き抜け、底まで届くと、水を吹っ飛ばしてクレーターを作り上げた。

状況を整理しようと思う。

召喚の儀式をどこかでミスしたらしく、逆に俺様が異世界に召喚されてしまった。さっき、口から火を吹く魚を殴り倒したので、少なくともここは地球ではない。

また、異常な戦闘能力を獲得したことも、間違いなさそうだ。たぶん、エリゴールとやらの力が俺様に宿ってしまったのだろう。

見た目からして、もともと戦いに適した悪魔なのは間違いなさそうだが、とりあえずシンプルな力の悪魔と合体したのはラッキーだった。よくわからんやつがよくわからん力よりは、よほどいい。

さしあたって、問題は。

「これからどうするか……だな」

それほどもとの世界に未練があるわけでもないが、やはり見知らぬ世界は何かと不安だ。類推できる情報には限度がある。

さっきの火を吹く魚のようなやつがいる以上、戦闘能力というのは間違いなく商売の資本になるはずだ。よって、金銭面はそれほど心配する必要もない。まあ、貨幣制度があり、人間が文明を築いていればの話だが。

技術の発展度合いや、文明の持つ独自性というものは、ある程度仕方がないとはいえ、とりあえず不安なのは言語だ。

言語が通じないと、行動を取るのは難しい。

もとの世界に帰る方法はいずれ探すことになるだろうが、生活は言葉なしで送れても、これは確実にコミュニケーションを要される。考えることが、多すぎた。

(頭おかしくなりそうだ)

イカれるくらい殴られたことはないはずだ。殴ったことはあるが。だから、俺様は正常なはずだが、状況の方が特殊すぎると、こっちも変になりそうだった。

とにかく、腹も減ったし町を探るか、と立ち上がる。

その瞬間、俺様の耳に金切り声が聞こえた。

「た、助け、助けてえーっ!!」

どうやら、異世界生活最大の懸念は、解決したようだった。

俺様が我ながら驚くほどの速さで参上すると、すでに現場は惨状だった。

死屍累々、鬼哭啾々。

よくファンタジーゲームなんかで並んでそうな騎士甲冑を纏ったオッサンたちが大量に倒れている。

アホみたいにかい馬車からは、この集団のリーダーなのか、いかにも貴族といった服装のナイスガイが生首を覗かせていた。あ、ついでに馬の方も。

この場で明白に生きている魂は、俺様を除けば2つ。

ホームレスでも今時もつとマシな服装をしているんじゃないかってくらい貧相なボロ布を巻いた女の子。他に女はいないから、さっきの悲鳴はこいつだな。

彼女がブルブルと震えながら短剣を向けているのは、大きな化け物だった。

これから、彼女の華麗な一撃が、あの化け物を粉碎するー

(なんてわけ、ねえよなあ)

少女は、どう見ても戦いに精通した様子ではない。

いや、俺様だって精通はしていないが。

とりあえず、大義名分と戦闘能力があるのだ。動物殺しを楽しんでも、咎められるまい。

「おい、嬢ちゃん、そこどきな」

「えっ………?」

槍をくるりと回し、映画の見よう見まねで構えてみる。
体長6メートルはあるかという化け物は、ムカデとサソリをくっつけたかのような姿をしていた。

「死ねやコラア！！」

ジャンプ。

軽く跳んだだけなのに、悠々と樹木より高く舞い上がる。
化け物は、こちらに狙いを定めたらしく、大きな鋏を振るってきた。

あー、こりゃ壊滅して当然だな。普通の人間じゃかわせねえわ。
でも、俺様はついさっき普通の人間なんかじゃなくなった。
鋏を槍で受け止めると、腕の上を走り、根元まで辿り着く。
右腕を引っこ抜くと、化け物は苦悶の声を上げた。

……いや、お前口無いだろ。
ふざけた生物だ。万死に値する。
槍を、一閃。

化け物の甲羅が、あっさりと斬れる。
その隙間を狙い、槍を全力で突き刺した。

「またつまらぬものを斬ってしまった……」

いや、刺したんだけれども。

まあ、トドメの一撃であることに変わりはない。
よく、漫画で剣を振ると斬撃が飛ぶが、アレの刺突バージョンと
でも言うべきなのか、俺様の一撃は化け物の体内をも貫き、衝撃波
で後方の木々をも薙ぎ倒した。

「す、すいこ……」

喉の奥から絞り出したかのような声が、女の子の口から漏れる。

驚いているのはむしろ俺様の方だったが、それは押し隠して、俺様は腰の抜けた彼女を助け起こすのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2351ba/>

世界で一番、優しい魔人

2012年1月6日00時50分発行